

説モ有尤サヤマヨリ出ル炭モ一段吉光ノ瀧炭ハ鼠色ニ粉ノ有白炭也、燒色也利休モ光瀧ニ増白炭ハ無之ト云シ也、

右光瀧ハ、ユビノ太サホドニシテ小枝有之、或ハ二ツニ割モ有之、夫ヨリ次第ニホンイモ有、其燒色薄白ク灰色ナリ、

一古田織部時代ノ白炭ハ小枝有之、細イ躑躅ナドヲ炭ニ燒テ、胡粉ヲ水溶テ之ラ上ヘ塗故、其色白粉ノゴトシ、小堀遠州時代マデ用之人多シ、然ドモ如此炭ニ胡粉ヲ塗テ白スルハ初心ナリ、燒色ノ光瀧ハ勝タリ、

一小堀遠州時代ノ白炭ハ、織部時分ノ胡粉塗ノシラ炭ニ種々品ヲ替テ取合テ用之、或ハ竹ノ小枝、或ハ松葉ヲ手一束ニ結、或ハ松笠、如此色々ノ物ヲ集テ炭ニヤキ、胡粉ヲ塗、或ハ胡粉ニ墨ヲ入テ鼠色ニ塗、或ハ埋木ノ灰ヲ塗テ、赤土色シテ用之、偏ニ彩色人形ヲ見ルゴトシ、遠州以後ハ、世ニモ初心成物ト知テ不用捨ル、

〔茶窓閒話中〕池田炭といへど、池田にて燒にあらす、攝津國多田の庄一倉といふ所にて燒、池田へ出し、池田より諸方へ送る故池田炭といふ、本名は一倉炭なり、むかしより茶道には是を最上とす、但し侘には京ならば小野炭、鞍馬の炭、美濃尾張邊にては伊勢炭、關東にてはさくら炭を用ふ、切て雨にあて用ふ、白炭は上古より和泉の横山にて燒出し、公卿官女の手によれられてもよごれざりしゆゑ、御堂上にて用ひられしなり、

〔和泉名所圖會〕堺名産

白炭 河州光瀧の山中にて燒たる炭を、こゝにて白く塗、茶湯の爐中に用ゆ、

〔改正月令博物筌三冬〕白炭花炭、枝炭、多くは躑躅の木をやきて、灰中に埋みぬれば白くなる也、枝出、或は梅の花とも存す、名品なり、竹